

80

彌性園第十二代当主 田中太一良（1873~1932）の 医績について

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

田中太一良は河内国大蓮村村長芦田慶次の長男として生まれ10歳で田中彌性園十一代徳太郎の養子として入籍した。慶次はもともと田中家から芦田家に入籍した婿養子であって、田中家はXY遺伝子が弱く婿養子を迎えたのは七代元允と九代元資が共に婿養子であったことに次ぐ3度目であった。太一良は幼少期から儒医の教育を受け14歳で設立間もない府立大阪中学校（北野中学校の前身）及び予備門を経て大阪府立医学校（大阪大学医学部の前身）に入学、大阪大学同窓会館書庫に太一良の学籍簿が残っている。明治31年に医師国家試験を経て臨床家として数年の研修ののち、河内国若江郡八尾東郷村彌性園での代々村医の診療を引き継ぐこととなる。義父徳太郎と叔父寛治郎は共に明治13年に儒医から西洋医への開業医師免許を取得していた。此の2人はのちに西洋式医療で大活躍する中河内郡での新規開業洋医12人衆のうちの2人である。徳太郎は森鼻宗次から種痘免許状を得ている。太一良は医学校在学中から再三再四新薬の処方や新知見を手紙で此の2人に書き送っている。明治末期になって八尾寺内町に移転し、この地一帯の診療に広く挺身する。特に種痘をはじめ度重なる襲来に遭うコレラ、インフルエンザ、猩紅熱、ジフテリアといった感染症の対策に苦闘する。内科をはじめ産婦人科、外科にも長じランプの光でクロロフォルム麻酔による小手術も行った。現今のゼネラルドクター、在宅医療の先駆である。明治27年、郡役所の在る八尾町に伝染病避病院設立の計画が起り、近郷24ヶ町村合立避病院が着工に漕ぎつけた。ところが翌28年夏、長崎からのコレラ病が蔓延して建築中の避病院は文字通り避難収容する患者で溢れてしまう。結果は百余名の内2名以外全て死亡という猖獗を極め、却って人心の不安を招いた。役所は疫病退散の鎮守神主による村々への巡回祈禱とお祓いの予定を張り紙するといった有様であった。明治29年避病院は竣工し其の後更に収容規模を拡張する時勢となる。現在の八尾市立病院の前身である。大正4年3月、新装なった北里研究所においてドイツから帰国した北里柴三郎、志賀潔らに直接受講して消毒法、隔離対策、環境理論、栄養学そして当時の治療法を徹底的に叩き込まれた上帰阪した太一良は、中河内郡医師会長、同防疫指導鑑に任命されコレラを始とする致死率を圧倒的に下降させることとなる。昭和4年には現役の開業医師でありながら八尾町長に任じられ（当時は町議会による官選）、診療と公務で終日人力車で走り回った。昭和7年大阪での陸軍大演習に際して戦車の通れる府道幅拡張のための突貫工事を督励中、雨に濡れたまま動き続けて肺炎を併発し現役首長のまま急死する。葬儀は彌性園家礼に則り正式な儒葬として執り行われた。河内地方でのおそらく最後の儒葬といわれている。田中太一良の医療業績と地方における明治から昭和までの開業医としての生きざまを写真や記録により迎る。